

# 善界

竹田法印作

季は	地は	ワキ	ツレ	シテ
雜	山城	叡山の僧	太郎坊	善界坊

「雲路を凌ぐ旅の空。く。出づる日の本を尋ねん。

「是は大唐の天狗の首領善界坊にて候。さても我国に於て。育王山青龍寺。般若台に至るまで。少しも慢心の輩をば。皆我道に誘引せずと云ふ事なし。誠や日本は。粟散遍地の小国なれども神国として。仏法今に盛んなる由承り及び候ふ間。急ぎ日本に渡り。仏法をも妨げばやと存じ候。

「名にしおふ。豊蘆原の国津神。く。青海原にさ

しおろす。天の瓊矛の露なれや。秋津島根の朝ぼらけ。其方もしく浮ぶ日の。神の御国は是かとよ。く。

「急ぎ候ふ程に。是は、や日本の地に着きて候。先承り及びたる愛宕山に立ち越え。太郎坊に案内を申さばやと存じ候。是は早愛宕山にて有りげに候。山の姿木の木立。是こそ我等が住むべき所にて候へ。如何に案内申し候。

ツレ詞  
「誰にて渡り候ふぞ。

シテ  
「是は大唐の天狗の首領善界坊にて候ふが。御目に  
かかり申し談すべき子細の候ひて。是まで遙々参  
りて候。

ツレ  
「さては承り及びたる善界坊にて渡り候ふか。先某  
が菴室へ御入り候へ。さて唯今は何の為めに御出  
でにて候ふぞ。

シテ  
「さん候唯今参る事余の儀にあらず。我国に於て。

育王山青龍寺。般若台に至るまで。少しも慢心の  
輩をば。皆我道に誘引せずと云ふ事なし。誠や日  
本は。小国なれども神國として。仏法今に盛なる  
由承り候ふ間。少し心にかかり。遥々是まで参り  
て候。同じくは御心を一つにして。自他の本意を  
達し給へ。

ツレ  
「さてはやさしくも思し召し立ち候ふ物かな。夫れ  
我国は天地開闢より此方。先以て神國たり。され

ば仏法今に盛なり。先々間近き比叡山。あれこそ

日本の天台山候ふよ。心のまゝに窺ひ給へ。

シテ「さてはいよ／＼便あり。夫れ天台の仏法は。権実

二教に分ち。

ツレ「又密宗の奥義を伝へ。

シテ「顯密兼学の所なるを。

ツレ「我等如きの類として。

シテ「たやすく窺ひ。

ツレ「給はん事。

地「蠟螂が斧とかや。猿猴が月に相同じ。かくは知れどもさすが猶。我慢増上慢心の。便を得んと思ふにも。大聖の威力を。いよ／＼案じ連ねたり。

地クリ「夫れ明王の誓約。まち／＼なりと云へども。其利益余尊に越え。正しく火生三昧に入り給ひて。一切の魔軍を焚焼せり。

シテサシ「外には忿怒の相を現ずといへども。

地

「内心慈悲の御恵。凝念不動の理を顯はし。但住衆生心想之中。實に有難き悲願かな。

クセ  
「然りとはいへども。輪廻の道を去りやらで。魔境

に沈む其歎き。思ひ知らずや我ながら。過去遠々

の間に。さすが見仏聞法の。其結縁の功により。

三悪道を出でながら。猶も鬼畜の身を借りて。い

とゞ仮敵。法敵となれる悲しさよ。今此事を歎か

ずは。未来永々を経るとしても。いつか般若の智水

を得て。火生三昧の。焰を遁れ果つべき。

シテ  
「世の中は夢か現か現とも。

地  
「夢ともいさや白雲の。斯かる迷ひを翻へし。帰服せんとは思はずして。いよく我慢の旗矛の。靡きもやらで徒に。行者の床を窺ひて。降魔の利剣を。待つこそはかなかりけれ。

ロシギツレ  
「かくては時刻移りなん。いざ諸共に立ち出でゝ。比叡の山辺の案内せん。

シテ「法の為め。今ぞ愛宕の山の名に。頼みを懸けて思

ひ立つ。雲の棧うち渡り。

地「我名やよそに高雄山。東を見れば大比叡や。

シテ「横川の杉の梢より。

地「南に続く如意が嶽。鷺の御山の雲や霞も。嵐と共に

ワキ一声「勅を受け。我立つ杣を出でながら。急ぐも同じ名

に失せにけり。」。（中入）  
に高き。大内山の道ならん。

ワキ「かくてやうく大比叡を。下りつつ行けば不思議  
やな。あれに見えたる下り松の。

地「梢の嵐吹きしをり。」。雲となり雨となる。

山河草木震動し。天に輝く稻光。大地に響く雷は。  
肝魂を暗まさす。こはそも何の故やらん。」。

後ジテ「そもそも是は。大唐の天狗の首領。善界坊とは我

事なり。あら物々しや如何に御坊。今更何の觀念  
をか為せる。夫れ若作障礙。即有一仏魔境と説け

り。あら痛はしや。欲界の内に生るゝ輩は。

地「悟の道や其まゝに。魔道の街となりぬらん。

地「不思議や雲の内よりも。く。邪法を唱ふる声すなり。本より魔仏一如にして。凡聖不二なり。自性清淨天然動きなき。是を不動と名づけたり。

ワキ「聴我説者得大智恵吽多羅吒干満。

地「その時御声の下よりも。く。明王現はれ出で給へば。矜迦羅制多伽十二天。各降魔の力を合はせて。御先を拝つておはします。

シテ「明王諸天はさて置きぬ。

地「明王諸天はさて置きぬ。東風吹く風に東を見れば。山王権現。

地「南に男山。西に松の尾。北野や加茂の。山風神風吹き払へば。さしもに飛行の翅も地に落ち。力も槐弓の八州の波の。立ち去ると見えしが又飛び来り。さるにても。かほどに妙なる仮力神力。今

より後は来るまじと。云ふ声ばかりは虚空に残り。  
言ふ声ばかり虚空に残つて。姿は雲路に入りにけ  
り。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第九輯』大和田建樹著